

「わたしはキリストの手紙」

エレミヤ書 31章33節
コリント人への第二の手紙 3章1節～6節

説 教 久保田拓志伝道師

「あなたがたは、自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている」とパウロが語ったこの言葉は、コリントの信徒達に対する、単なる人間的な信頼関係を言い表しているのではありません。新共同訳聖書を見ますと、「はっきりとあらわしている」という箇所は、「公にされている」と訳されています。「公にされている」というのは、神の御前で、キリストご自身の十字架と復活とによって打ち立てられた救いの契約によって公にされた手紙、それがあなたという人間だということです。心というのは、元の意味をたどると、「人間の最も奥深い内部」という意味であり、罪深い肉の思いに囚われている私たちの最も奥深い、私たちの中心に、キリストの手紙が刻み込まれるということです。生ける神の霊、神の尽きることのない無尽蔵の力によって、私たちの中心に、キリストの手紙が今日も書き続けられているのです。

昨年、婦人会と初穂会とが、前任の岡村牧師の講演と説教をまとめてくださった「われらここに立つ。大阪教会の信仰 宗教改革500周年に寄せて」という冊子があります。この書物の表題である「われらここに立つ」は、ルターの言葉「われらここに立つ」から引用したとお聞きしました。ルターは、どのような状況で、この言葉を語ったのでしょうか。

「われ、ここに立つ。」ルターが、ここと呼んだ場所は、国会の議場であり。この世の最高権力者皇帝カール5世と、神聖ローマ帝国の議員約400名の面前です。しかし、ルターにとって、もっと大事だった「ここ」とは神の面前である「ここ」であり、カール5世の前ではなく、神の前で明らかにされている自分の良心こそが大切でした。「神よ助けたまえ」とルターは、神の御前で祈りました。自分の考えを撤回することを拒否することで、カール5世から帝国追放令を受け、身の安全が一切保証されなくなっても、彼を支えたものは、他ならぬ神様の恵みそのものでした。ルターは自分の考えを宣言するにあたって、一日の猶予を求めたといわれています。即答しなかった。あるいはできなかったのかも知れません。ルターとて、そこに恐れがあって当然の状況でした。しかし、聖書は、しばしば、こう私たちにもこう語り掛けます。「恐れるな」と。私たちの心にも確かに、「恐れ」があります。

しかし、神様は、私たちに強引なまでに「恐れるな」と語り掛けてくださるのです。

どれほど文明が発達したとしても、常に人間は「死と滅びへの不安」に生きています。私たちの心の中には常に恐れがあります。しかし、私たちが自分自身の力で、死の不安や罪の力に打ち勝つことができなかつたとしても、絶望する必要はないのです。なぜなら、私たちの心には、キリスト御自身からの手紙が、しっかりと刻みつけられているからです。このイエス・キリストからの呼びかけに気付く時、私たちは、真の責任にも目覚めます。責任という言葉は、日本語ではしばしばその前に自己という言葉がつけられ、自己責任という言葉が語られます。しかし、英語で責任とはリスポンシビリティ、応答という意味です。主イエスからの呼びかけに応答する時、すなわちキリストの手紙をその心に刻み込まれた者として生きる時、そこに真のリスポンス、責任が生まれてきます。それは、感謝と喜びに満ちた真の責任の姿であります。

今、受難節の時を刻んでいます。キリストがオリブ山で血の汗をしたたらせながら、神のみ心を受け取ろうとしてみてくださいあの御苦しみを思うとき、十字架への道をまっすぐに進まれたその御心を思う時、すでに、キリストの手紙が、あなたの肉なる思いの中心部分に、そのど真ん中に、生ける神の霊によって刻み込まれています。神が、天地を創造された時から、この世界に注ぎ込まれてきた、ご自身の愛を、あなたの、この私のだ真ん中に刻み込む。十字架のもとで、私たちは、この驚くべき恵みにひれふすよりほかはないのであります。その時、私たちは、恐れの中にあって、なお、自分自身と隣人に対して責任ある人生へと一歩を踏み出す勇気が与えられています。

「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。」と主イエス・キリストは約束をされました。滅びることのないキリストの言葉は、わたしたちの心に、生ける神の霊によって記され、これからも記され続け、常にわたしたちと共にあります。心が不安と恐れに苦しむとき、どうかそっと自分に語り掛けてみてください。「この私がキリストの手紙だ」と。

(記 久保田拓志)